

# マンツーマン推進プロジェクト 講習会資料

2021/4月

マンツーマン推進プロジェクト

1. 講習の目的と2021年現在の方向性
2. マンツーマン推進の意義・目標
3. マンツーマンディレクター・マンツーマンコミッショナー
4. マンツーマン推進における基準規則・運用
5. マンツーマンコミッショナーの対応（事例を元に）
6. マンツーマン推進における都道府県内での組織について

## 1) 講習の目的

- ①マンツーマン推進に対して理解を深める。
- ②子供たちの成長を促すためにマンツーマンコミッショナーをはじめ、バスケットボールに関わる全ての方に対して「健全な競技環境整備の推進」について情報を共有する。

## 2) マンツーマン推進の目的・方向性 (2018/12/15)

- ①フェアプレー精神を指導者/プレーヤーに浸透させる
- ②マンツーマン推進事業を継続する
- ③指導者はマンツーマン推進事業の目的を再認識する
- ④指導者は基本技術の重要性の理解を深める
- ⑤指導者は育成世代で学ぶべきゲームモデルの理解を深める
- ⑥コミッショナーは統一した見解を持つために情報共有の図り研鑽を積む

## 2020年度以降の方向性（2019/12/15確認、2020/12/13再確認）

### 【総論】

「マンツーマンかゾーンかを判定すること」がコミッショナーの役割であることを確認。  
マンツーマン推進を考慮しつつ、基準規則に準拠した役割を果たしていくこと。  
コミッショナー配置は当面継続する。

### 【U12】

全国ミニバスケットボール大会、ブロックミニバスケットボール大会において  
コミッショナー配置を実施。  
厳しく取り締まる方向性ではなく、「技術不足は罰しない」方針を確認する。

### 【U15】

「心情を加味せず、現象面を捉えて判定すること」を継続する。  
全国U15選手権プレ大会（2019年度）、全国U15選手権（2020年度）、全中ブロック予選、  
全中においてコミッショナー配置を実施。

### 1) 背景

- ①世界の強豪国は16歳以下、また国際バスケットボール連盟（FIBA）もミニバスケットボールでのゾーンディフェンスを禁止している。
- ②2014年頃では日本の多くのU12チームがゾーンディフェンスを導入しており、またU15チームにおいても多くがゾーンディフェンスを中心に試合を組み立てている。
- ③15歳まではコーディネーショントレーニングや基礎的なスキルを学ぶべき年代であるが、ゾーンディフェンスを主に指導されているため、オフェンス、ディフェンスの両面において、1対1の対応力が不足している。

### 2) 趣旨

- ①「プレイヤーズ・センタード・コーチング」「育成マインド」の考えの元、目先の勝利に捉われない長期的視点に立った指導の推進。
- ②バスケットボールの楽しさの強調、個の育成を進めるための競技環境整備。

### 3) 目標

- ①強力な1対1の突破力、得点力のある選手を育成する。
- ②ディフェンスで相手を止められる選手を育成する。
- ③高い運動能力を持ち、オールラウンドプレーとして活躍できる選手を育成する。
- ④マンツーマンディフェンスの強化により、将来的にゾーンディフェンスの活用を含めた総合的なディフェンス力の強化を図る。

### 4) 個の育成とは何か? (2018/12/15)

獲得させたい土台（スキル）：個人のオンボールのオフェンス・ディフェンス、  
オフボールのオフェンス・ディフェンスを身につけ向上させること。

- オンボールオフェンス：個人で破っていく力、得点を取る力  
→ ショット、ドライブ、パス、1対1の駆け引き
- オンボールディフェンス：個人で守りきる力  
→ ショット、ドライブを止める（インラインを守り続ける）
- オフボールオフェンス：スペーシング・タイミング  
→ どこにいるか、どこへ動くか  
→ いつ動くか
- オフボールディフェンス：ポジショニング・ビジョン・予測する力  
→ マークマンをノーマークにしない  
→ ボールマンディフェンスを助ける  
→ ボールとマークマンを常に捉える

#### 1) マンツーマンディレクターの目的・要件・役割・位置づけ

##### <設置目的>

- ①都道府県において、マンツーマンの趣旨や導入目的を指導者及び選手に浸透させ、子供たちのためにより良い競技環境整備を推進すること。
- ②日本全国において、一貫した基準でのマンツーマンの推進を行うこと。

##### <資格要件>

- ①バスケットボール競技特性を熟知し、役割を担える者。
- ②JBAコーチライセンス保有者（C級以上が望ましい）

##### <役割>

- ①都道府県協会において、マンツーマン推進の中心的役割を担う。
- ②都道府県内において、マンツーマン推進の趣旨、導入目的を指導者および選手等に伝達する。
- ③都道府県内において、マンツーマンを推進するための講習会を企画・立案し、指導者およびマンツーマンコミッショナーの育成・強化を図る。
- ④JBAおよび都道府県内の関連団体（中体連等）と連携し、情報発信・収集を行うとともに、円滑なマンツーマンの推進を図る。
- ⑤（必要に応じて）アシスタントディレクターの養成を行う。

##### <位置づけ>

- ①都道府県アンダーカテゴリー部会内に設置。

#### マンツーマンディレクターの設置目的

- 都道府県内においてマンツーマンの趣旨や導入目的を指導者および選手に浸透させ、子供たちのためにより良い競技環境を構築すること。
- 日本全国において一貫した基準でのマンツーマンの推進を行うこと。

#### マンツーマンディレクターの資格要件

- バスケットボール競技特性を熟知し、以下の役割を担える者
- JBAコーチライセンス保有者（C級以上が望ましい）



#### マンツーマンディレクターの主な役割

- 都道府県協会において、マンツーマン推進の中心的役割を担う。
- 都道府県内において、マンツーマン推進の趣旨、導入目的を指導者および選手等に伝達する。
- 都道府県内において、マンツーマンを推進するための講習会を企画・立案し、指導者およびマンツーマンコミッショナーの育成・強化を図る。
- JBAおよび都道府県内の関連団体（中体連、中学生連盟、ミニ連盟等）と連携し、情報発信・収集を行うとともに、円滑なマンツーマンの推進を図る。
- （必要に応じて）アシスタントディレクターの養成を行う。

#### その他

- 都道府県協会とJBAとの窓口を一本化するためにマンツーマンディレクターは各都道府県協会1名としますが、各協会においてディレクターの補佐を行うアシスタントディレクターを設置していただいても構いません（人数制限も行いません）。各都道府県の状況に応じて円滑な推進が可能な体制の構築をお願い致します。

#### 2) マンツーマンコミッショナーの役割・視点

##### <役割>

- ①ゲームにおいて、マンツーマン推進を図るために、マンツーマンかゾーンかを見極める。
- ②起こっている事象に対して客観的に判定をする。

#### ■ マンツーマンコミッショナーの重要な視点 (2018/12/15)

- 1) マッチアップしているか、または、マッチアップしようとしているか  
(人=マンツー、場所=ゾーン)
  - オフェンスのスタート
  - カッティングに対して、適切にマークしているか (ついていってるか)
  - トラップの後
  - ペネトレーションに対するヘルプの後
  
- 2) オフボールディフェンスのポジショニング、ビジョン (ボールとマークマン) を適切に実行しているか

#### 2) マンツーマンコミッショナーの判定基準の考え方 (2019/5/7)

##### ●考え方

コミッショナーは、ゲームの状況を考慮しながら判定を行うべきではなく、事象のみに対して客観的に判定する。

##### ●理由

心情やゲーム状況を考慮に入れながら判定することは、判定者の主観が大きく含まれることになり、判定基準の幅が広がることに繋がり、明確性に欠けることになる。

##### ●今後

ゲームにおいてコミッショナーが判定する際の考え方（事象のみに対して客観的に判定する）を周知徹底する。

ルールの変更ではないため、できる限り速やかに実施運用をお願いする。

### 1) なぜU12とU15で異なるのか

- ・ U12とU15で発達段階、バスケットボールの習熟度が異なるため。
- ・ U12では1985年～1988年にゾーン禁止を行ったが撤廃した経緯がある。マンツーマンの定義をより明確にすることで、指導者への理解を図り、個の成長を支える土台をつくる目的がある。
- ・ U15では制限のないバスケットボールが次の世代（高校世代）から始まることを考慮して、U12より自由度を高めることを許容している。

### 2) 共通

- ・ 黄旗は注意を促す。
- ・ 赤旗対応
  - ブザーを鳴らし時計を止める。
  - 攻守交代の時点でプレー・ショットクロックを止めるため、その後に起こったことは無効。
- ・ テクニカルファウル処置（2019/3）
  - マンツーマンペナルティとテクニカルファウルの考え方を整理。
- ・ マンツーマンペナルティの処置（2019/12/15）
  - テクニカルファウルの処置変更に伴う対応。

### 3) U12とU15の相違点

- ・ トラップ三要件（U12）
- ・ 技術不足は罰しない（U12）
- ・ 予測に基づいていると判断した場合は旗をあげない（U15）
- ・ 4Q、OTの最後の2:00における違反は1回目でも赤旗の対象とできる（U15）
- ・ 4Q、OTの最後で赤旗があがったまま次元が終了した際に、フリースローを行っても勝敗に関係のない場合は処置をしない（U15）
- ・ マンツーマンペナルティによる退場：U12は3個、U15は2個

U12U15  
マンツーマン推進における  
テクニカルファウル対応変更について

2019/3

マンツーマン推進プロジェクト

## 1. インテグリティ委員会の経緯

- ・ 2018年12月25日 インテグリティ委員会設立(委員長:宇田川貴生) をJBA理事会で承認
- ・ 2019年1月28日 第1回インテグリティ委員会開催

## 2. 第1回インテグリティ委員会における決定内容

- ・ JBA含め全ての団体における共通スローガン(主題)として【クリーンバスケット、クリーンゲーム】を決定した。
- ・ JBAとしては副題として喫緊の課題である【暴力暴言根絶】とした。
- ・ 委員会としてスローガンを実現していくために以下を決定した。
  - 1) バナーを作成して大会においてメッセージを発信し、啓発活動を実施(2019年3月ジュニアオールスター、全国ミニ、4月より全国にて)
  - 2) コーチが全ての選手に対する暴力的行為及び暴言は競技規則に則りテクニカルファウル(C)として取り扱うことを確認した。
    - ※ 今までテクニカルファウルの運用としてコーチが選手に対する暴言等をテクニカルファウルの対象として取り扱っていなかった。
    - ※ 暴力行為に対しては、ディスクォリファイングファウルとして失格退場である。
  - 3) 競技規則によりテクニカルファウル(C) 2個で失格退場となるが、規律案件(次の試合出場停止等)とはせず当該試合のみの対応とする。
    - ※ 競技規則によるコーチの失格退場
      - a) ディスクォリファイングファウル 1個
      - b) テクニカルファウル(C) 2個
      - c) テクニカルファウル(B) 3個
      - d) テクニカルファウル(C) 1個+テクニカルファウル(B) 2個
  - 4) テクニカルファウルの対象となる暴力的行為及び暴言に関する事例集(ガイドライン)は、指導者養成・ユース育成部会で原案作成し、インテグリティ委員会で承認するものとする。

## 1. テクニカルファウルの扱い

- 1) 試合中、コーチが全ての選手に対する暴力的行為及び暴言に対しては、  
コーチのテクニカルファウル(C)とする。
- 2) コーチのテクニカルファウル(C) 2個で失格退場とする。  
※ U12ではこれまでテクニカルファウルによる失格退場はなかった。

## 2. マンツーマン推進のテクニカルファウル

- 1) マンツーマン推進における「赤旗対応によるテクニカルファウル」については  
「マンツーマンペナルティ(M)」とする。  
※ 競技規則に準じたテクニカルファウルと区別するため（マンツーマンペナルティは国内独自ルール）
1. マンツーマンペナルティの場合、スコアシートコーチ欄に(M)と記述する
2. マンツーマンペナルティ(M)は、U12においては3個で失格退場とする。
3. 失格退場に対しては規律案件としない。
4. マンツーマンペナルティ(M)とテクニカルファウル(C・B)との合算による失格退場は設定しない。

## ■ コーチ失格退場のケースにおけるU12での対応 ※1

コーチライセンス資格を持つコーチが失格退場となった場合の試合継続の可否については競技規則に則り没収試合の扱いとしない。

※ 競技規則ではコーチが失格退場の場合、キャプテンが代行することになっている。

1. ベンチにヘッドコーチの他にアシスタントコーチをおく。 ※2
2. アシスタントコーチがいない場合はチーム代表者や保護者代表をベンチ登録すること。

※1 大会要項に記載しておくことが望ましい。

※2 複数の指導者がコーチライセンス資格を持っていることが望ましい。



## 1. テクニカルファウルの扱い

- 1) 試合中、コーチが全ての選手に対する暴力的行為及び暴言に対しては、  
コーチのテクニカルファウル(C)とする。
- 2) コーチのテクニカルファウル(C) 2個で失格退場とする。

## 2. マンツーマン推進のテクニカルファウル

- 1) マンツーマン推進における「赤旗対応によるテクニカルファウル」については  
「マンツーマンペナルティ(M)」とする。

※ 競技規則に準じたテクニカルファウルと区別するため（マンツーマンペナルティは国内独自ルール）

1. マンツーマンペナルティの場合、スコアシートコーチ欄に(M)と記述する
2. マンツーマンペナルティ(M)はU15においては2個で失格退場とする。
3. 失格退場に対しては規律案件としない。
4. マンツーマンペナルティ(M)とテクニカルファウル(C・B)との合算による失格退場は設定しない。

## ■コーチ失格退場のケースにおけるU15での対応 ※1

コーチライセンス資格を持つコーチが失格退場となった場合の試合継続の可否については競技規則に則り没収試合の扱いとしない。

※ 競技規則ではコーチが失格退場の場合、キャプテンが代行することになっている。

1. ベンチにヘッドコーチの他にアシスタントコーチをおく。 ※2
2. アシスタントコーチがいない場合はチーム代表者等をベンチ登録すること。
3. コーチの失格退場によりベンチに指導者/代表者が不在となった場合、会場主任/コート主任等がベンチに入ることも可とする。 ※3

※1 上記項目を大会要項に記載しておくことが望ましい。

※2 複数の指導者がコーチライセンス資格を持っていることが望ましい。

※3 選手に試合の責任を負わせることは負担が大きいとの配慮からの処置である。大会において取り入れの可否を主催者が取り決めすることで構わない。

### ■ マンツーマンペナルティの罰則変更について（2019/12/15）

#### 【2回目の赤旗が上げられた際の処置】

- ・ 2018年度まで  
種類：テクニカルファウル  
罰則：1ショット+スローインで再開
- ・ 2019年度から  
種類：マンツーマンペナルティ  
罰則：1ショット挟み込み（テクニカルファウルの罰則を準用）
- ・ これらの変更に伴い、マンツーマンペナルティが宣せられた際、1本のフリースローが与えられた後、違反したチームのスローインから再開されるケースが多くなった。

#### 【罰則変更】

- ・ 2020年度から  
種類：マンツーマンペナルティ  
罰則：1ショット+スローインで再開（マンツーマンペナルティ独自の罰則）

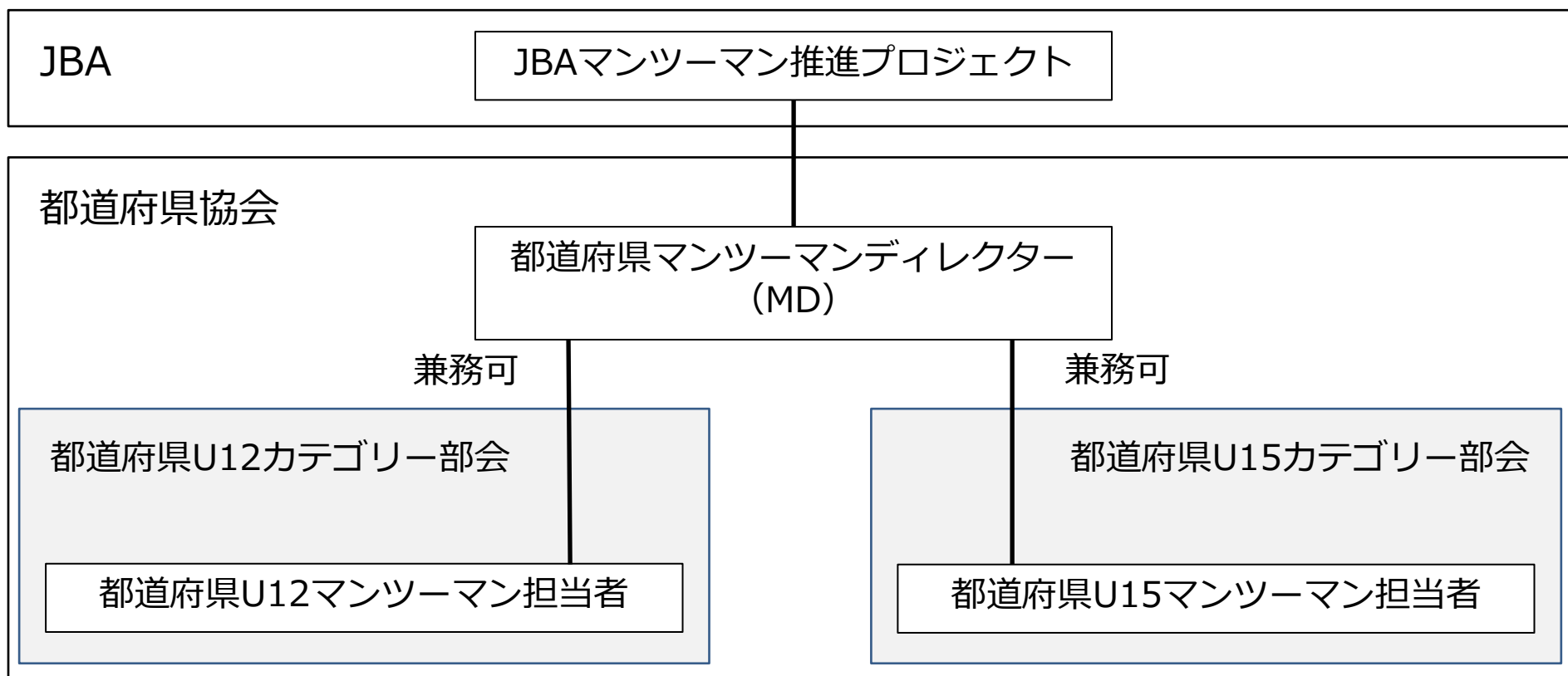
## 5. マンツーマンコミッショナーの対応（事例を元に）

1. U15における対応ケースと対応としないケース
2. U12における対応ケースと対応としないケース

## 6. マンツーマン推進における都道府県内での組織

- ・ U12部会、U15部会にまたがるマンツーマン担当を設置し、マンツーマンディレクターを設置する。
- ・ U12部会、U15部会において、マンツーマンコミッショナーを統括する担当を置く。
- ・ マンツーマンディレクターは所管事項（役割）を確認し、都道府県内のマンツーマン推進について講習会を企画する。

※ マンツーマン推進の独立した組織は設置せず、必ずU12/U15の各カテゴリー内に担当者を置いてください。



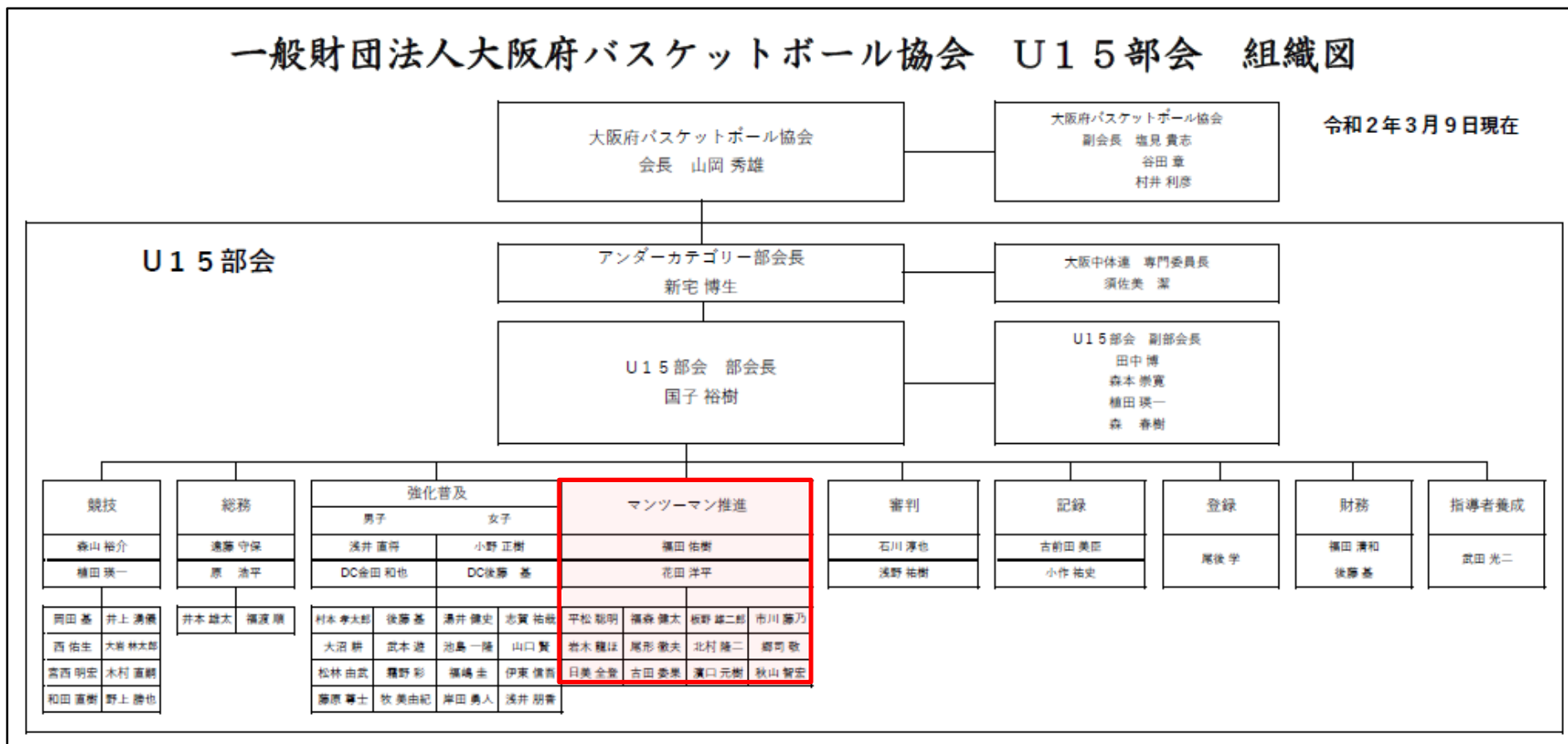
## 6. マンツーマン推進における都道府県内での組織

### ■ 都道府県U12/U15カテゴリー部会の組織図（大阪府U15カテゴリー部会の例）

- ・ 都道府県U12/U15カテゴリー部会内に、マンツーマン推進担当者を置いてください。
- ・ U12/U15の担当者は、MDと兼務でも結構です。

### 一般財団法人大阪府バスケットボール協会 U15部会 組織図

令和2年3月9日現在



マンツーマンディレクター会議  
資料集

2016年度～2020年度

# 2020年度 マンツーマンディレクター会議

2020/12/13

JBAマンツーマン推進プロジェクト



**1. 2018年度、2019年度の振り返りと2020年度のこれまで<説明>**

①コロナ禍による2019年度、2020年度大会の中止

- ・ U15選手権（2020年3月）、全国ミニ（2020年3月）
- ・ 全中ブロック、全中（2020年8月）
- ・ ミニブロック大会（2020年12月～2021年2月）北海道、北信越、東海、中国、九州

**2. これまでの方針と今後<説明>**

①2018年度（2018/12/15）、2019年度ディレクター会議（2019/12/15）

- ・ 2018年度資料
- ・ 2019年の総括と2020年の方向性

②2020年度ディレクター会議より今後

**3. 運用の課題について（ブロック別・意見交換）**

**4. 都道府県内での推進について（ブロック別・意見交換）**

**5. ルールの一元化について<報告>**

**6. その他**

## 1. これまでの方針を継続

### ①2018/12/15

- 方向性
- プレーヤーに獲得させたい土台
  - 1) オンボールオフENS : 1対1での突破力、判断能力の向上
  - 2) オンボールディフェンス : 1対1で守る力
  - 3) オフボールオフENS : スペーシング、動きのタイミング（合わせ）
  - 4) オフボールディフェンス : ビジョン（ボールとマーク）、ポジショニング、予測力
- ゲームモデルの周知
- マンツーマン・ゾーンを見分ける重要な視点

### ②2019/12/15

- U12 : 技術不足を罰しない
- U15 : 心情をはさまず判定をすること  
オフボールディフェンスのポジショニング・ビジョンをよく見ること

## 2. 育成マインドを知り、マンツーマン推進に活かす

- 1) フェアプレー精神を指導者/プレーヤーに浸透させる
- 2) マンツーマン推進事業を継続する
- 3) 指導者はマンツーマン推進事業の目的を再認識する
- 4) 指導者は基本技術の重要性の理解を深める
- 5) 指導者は育成世代で学ぶべきゲームモデルの理解を深める
- 6) コミッショナーは統一した見解を持つために情報共有を図り研鑽を積む

## ■プレーヤー・指導者ともにフェアプレー精神を持つ

ルールの間隙を狙うのではなく、目的を理解し、プレーヤーにフェアプレー精神を伝えよう

- ルールを守る = 決めたことを守る
- 審判に従う = コミッショナーに従う
- 相手をリスペクトする = ルールの中で全力を尽くす相手を尊重する

「マンツーマンを使って勝負をする」

## ■指導者はプレーヤーの将来を見据えた指導を行おう

- 強い「個」を作る必要があるので、指導者にマンツーマンを指導してもらおう

「ゾーンをするのは育成世代の目標から外れている」

「育成世代の勝利/成功は、勝敗だけでなく、将来の成長スピードを高める土台を身につけることでもある」

## ■ なぜマンツーマン推進が必要となったのか？

- 世界に通じるトップ選手を作り出していくため
- そのためには個の強化が必要であり
- 育成世代においてはまず個の強化の土台の構築が必要
- 勝利を得るためには組織的ディフェンスが効果的な年代
- 勝利よりも優先してやるべきことがあるのが育成年代

## ■ マンツーマンが必要である

- マンツーマンができないと選手としては成長スピードが遅れる
- ゾーンディフェンスはあるレベルを越えると通じにくくなる

## ■ 施策の今後

- 1) 育成世代の選手に求めるものは「個の力の獲得」であり、選手の将来を鑑み、選手の土台作りとしての要素を高めるためにも、この施策は継続して実施する方向である
- 2) プレイヤーがどのような能力を高めなければならないかを考えると、ゲームモデルについての理解を深めることも必要である。どのようなオフェンスを行えばディフェンスを崩せるのか、ヘルプが強いタイプに対してどのようなアタックが有効か、ハーフコートトラップに対しての対抗策や、トラップを突破するための個人技術の理解などを深めることにより、現状より進んだスタンダードが得られるものと考えている。

## ■ 「なぜ？」

- 1) ゾーンを4Qのみ許可することの要望について、これを許可すれば練習において準備をすることが必要となり、基本技術を学ぶ時間が削られる事がマイナスと考える。よって現状認めない方向である。
- 2) 高校世代でゾーンに慣れていないためマイナスとなるとの指摘について、「マンツーマンの土台があれば、高校においてゾーンアタックを習得することは比較的容易になる」と技術委員会との意見あり。

## ■ ゲームモデルの段階

- 1) 1対1重視：突破を図ることを狙う段階（ペイントアタックの意識、突破技術を磨く）
  - ドライブ&キックが必要→スペーシングを指導
- 2) 1対1重視：パス&カットで人を動かし、ボールを動かすことで突破を図る段階
  - ディフェンスが強くなるので、動いてズレを生み出す
  - ボールをつなぐスポット、タイミングの指導
- 3) 1対1、2対2：パス&カットの中からオフボールスクリーンを利用する段階
  - スクリーナーのセット技術の指導
  - スクリーンを使うユーザーの技術の指導
  - スクリーンを使う必要がなければスペーシングを取ることを考えた方がよい
- 4) 1対1、2対2、3対3：相手のディフェンス力が高まり、自力で突破できない時にオンボールスクリーンを使って突破を図る段階
  - オンボールスクリーン・ボールマンの技術
  - オンボールスクリーン・スクリーナーの技術
  - オンボールスクリーン・ヘルプサイドのスペーシング及びプレー

■ 重要な視点

1) マッチアップしているか、マッチアップしようとしているか

(人=マンツーマン、場所=ゾーン)

→オフェンスのスタート

→カッティングについていくか

→トラップの後

→ペネトレーションに対するヘルプの後

2) オフボールディフェンスのポジショニング、ビジョン (ボールとマークマン) を取ろうとしているか

■内容

**1. マンツーマン推進・オフENSについて（トーステン・ロイブル氏）**

- ・FIBAコーチ教育におけるゾーン禁止（マンツーマンの考え方）について
- ・オフENS推進（オンコート）

**2. 2019年の総括**

- ・U12
- ・U15

**3. 2020年の方向性**

- ・U12
- ・U15
- ・U15における調査報告から

**4. ルール変更点**

- ・マンツーマンペナルティの罰則の変更

**5. 2019年度（12月以降）開催競技会のコミッショナー配置について**

- ・全国U15選手権プレ大会
- ・U12ブロック大会
- ・全国ミニバスケットボール交歓大会

**6. ブロック幹事の決定**



### 2. 2019年の総括

#### 【U12】

2019年3月の全国ミニバスケットボール大会では、赤旗71件、マンツーマンペナルティ12件。  
赤旗の数が減ってきているだけでなく、内容的に前進が見られているとの評価。  
全国ミニでのコミッショナー講習、U12ブロックDCでのマンツーマン講習により判定の考え方について統一を図っている。

#### 【U15】

2019年3月のジュニアオールスター大会では、3日間で黄旗77件、赤旗11件。  
ベンチとコミッショナーのコミュニケーションが意識して行われた。  
オールコートディフェンスでの違反が多く見られた。  
全中に向け、全ての全中ブロック予選においてコミッショナー講習会を実施し、  
「心情をはさまず判定をすること」  
「オフボールディフェンスのポジショニング・ビジョンをよく見ること」  
を特に確認した。  
その結果、全中では黄旗・赤旗対応が増えた（事象に対して対応している）。  
3日間で、黄旗は男子39件、女子35件。赤旗は男子7件、女子5件。

#### 3. 2020年の方向性

##### 【総論】

「マンツーマンかゾーンかを判定すること」がコミッショナーの役割であることを確認。  
マンツーマン推進を考慮しつつ、基準規則に準拠した役割を果たしていくこと。  
コミッショナー配置は当面継続する。

##### 【U12】

全国ミニバスケットボール大会、ブロックミニバスケットボール大会において  
コミッショナー配置を実施。  
厳しく取り締まる方向性ではなく、「技術不足は罰しない」方針を確認する。

##### 【U15】

「心情を加味せず、現象面を捉えて判定すること」を継続する。  
全国U15選手権プレ大会（2019年度）、全国U15選手権（2020年度）、全中ブロック予選、  
全中においてコミッショナー配置を実施。

##### 【U15における調査報告から】

別紙による

# 2019年度 全国マンツーマンディレクター会議 〈資料〉

2019/12/15

JBAマンツーマン推進プロジェクト

## ■ 内容

### 1. マンツーマン推進・オフENSについて（トーステン・ロイブル氏）

- ・ FIBAコーチ教育におけるゾーン禁止（マンツーマンの考え方）について
- ・ オフENS推進（オンコート）

### 2. 2019年の総括

- ・ U12
- ・ U15

### 3. 2020年の方向性

- ・ U12
- ・ U15
- ・ U15における調査報告から

### 4. ルール変更点

- ・ マンツーマンペナルティの罰則の変更

### 5. 2019年度（12月以降）開催競技会のコミッショナー配置について

- ・ 全国U15選手権プレ大会
- ・ U12ブロック大会
- ・ 全国ミニバスケットボール交歓大会

### 6. ブロック幹事の決定

### 2. 2019年の総括

#### 【U12】

2019年3月の全国ミニバスケットボール大会では、赤旗71件、マンツーマンペナルティ12件。赤旗の数が減ってきているだけでなく、内容的に前進が見られているとの評価。全国ミニでのコミッショナー講習、U12ブロックDCでのマンツーマン講習により判定の考え方について統一を図っている。

#### 【U15】

2019年3月のジュニアオールスター大会では、3日間で黄旗77件、赤旗11件。ベンチとコミッショナーのコミュニケーションが意識して行われた。オールコートディフェンスでの違反が多く見られた。全中に向け、全ての全中ブロック予選においてコミッショナー講習会を実施し、  
「心情をはさまず判定をすること」  
「オフボールディフェンスのポジショニング・ビジョンをよく見ること」  
を特に確認した。  
その結果、和歌山全中では3日間で、黄旗は男子39件、女子35件。赤旗は男子7件、女子5件。

### 3. 2020年の方向性

#### 【総論】

「マンツーマンかゾーンかを判定すること」がコミッショナーの役割であることを確認。  
マンツーマン推進を考慮しつつ、基準規則に準拠した役割を果たしていくこと。  
コミッショナー配置は当面継続する。

#### 【U12】

全国ミニバスケットボール大会、ブロックミニバスケットボール大会において  
コミッショナー配置を実施。  
厳しく取り締まる方向性ではなく、「技術不足は罰しない」方針を確認する。

#### 【U15】

「心情を加味せず、現象面を捉えて判定すること」を継続する。  
全国U15選手権プレ大会（2019年度）、全国U15選手権（2020年度）、全中ブロック予選、  
全中においてコミッショナー配置を実施。

#### 【U15における調査報告から】

別紙による

### 4. マンツーマンペナルティの罰則変更について

#### 【2回目の赤旗が上げられた際の処置】

- ・ 2018年度まで

種類：テクニカルファウル

罰則：1ショット+スローインで再開

- ・ 2019年度から

種類：マンツーマンペナルティ

罰則：1ショット挟み込み（テクニカルファウルの罰則を準用）

- ・ これらの変更に伴い、マンツーマンペナルティが宣せられた際、1本のフリースローが与えられた後、**違反したチームのスローインから再開される**ケースが多くなった。

#### 【罰則変更の提案】

- ・ 2020年度から

種類：マンツーマンペナルティ

罰則：**1ショット+スローイン**で再開（マンツーマンペナルティ独自の罰則）

<詳細は別紙>

### ◆2019年度 全国U15選手権プレ大会（2020/3/27～30開催）

項目	内容
配置	2名/1試合
担当	3試合/1日
招集人数	1コート4名×最大5コート=20名+4名
招集の原則	各ブロックとから招集、関東は人数を増やして対応する 都府県内のゲームでMC実務を担当した方とする 全国大会やブロック大会の経験者が望ましい
招集人数	北海道、東北、北信越、東海、近畿、中国、四国、九州 →各ブロック2名×8ブロック=16名 関東（茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、山梨） →各都県1名×8都県=8名



### ◆2019年度 全国ミニバスケットボール交歓大会（2020/3/28～31開催）

項目	内容
配置	2名/1試合
担当	3試合/1日
招集人数	1コート4名×最大8コート=32名+4名
招集の原則	各ブロックとから招集、関東は人数を増やして対応する 都府県内のゲームでMC実務を担当した方とする 全国大会やブロック大会の経験者が望ましい
招集人数	北海道、東北、北信越、東海、近畿、中国、四国、九州 →各ブロック2名×8ブロック=16名 関東（茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川、山梨） →各都県2名×8都県=16名+運営担当者4名

### 【ブロック幹事の役割】

- ① ブロックにおけるマンツーマン推進に関する情報や課題の共有と連絡調整を行う。
- ② U12/U15カテゴリーのブロック単位競技会において、開催地のマンツーマンディレクターや大会マンツーマン担当者とともに、競技会におけるマンツーマン推進を行う。
- ③ 全国大会に派遣されるマンツーマンコミッショナーの選出について、各都道府県のマンツーマンディレクターと連絡調整し、決定、報告する。

### 【ブロック幹事の任期】

- ① ブロック幹事の任期は、4月1日から翌年3月31日までの1年間とする。  
但し、2019年度マンツーマンディレクター会議にて互選されたブロック幹事の任期のみ、2020年1月1日から2021年3月31日までとする。

### 【ブロック幹事の選出】

- ① ブロック内各都道府県のマンツーマンディレクターの互選により決定してください。
- ② 代理出席等の関係で、本日中に決定できなかった場合は、  
12月23日(月)までに決定し、JBA事務局まで報告してください。

**※この後のブロック別打合せにて決定してください。  
決定後、JBA事務局・松澤までご報告ください。**

# 2018年度マンツーマン推進ディレクター会議

2018/12/15

マンツーマン推進プロジェクト

1. 2018全中の検証
2. アンケート結果
3. 3年間の検証
4. 今後の方向性

## 【検証】

- 1) 2017年12月マンツーマンディレクター会議にて中学世代には制限を緩和した。2018全中において男女共にゾーンプレスと判断できるプレーがあった。
- 2) ボールを持っているプレーヤーにトラップを仕掛けること、ワンパスアウェイに対してインターセプトを狙う戦術が効果的であった。ツーパスアウェイがノーマークになるが、中学世代では技術、視野に乏しくトラップに対して長い距離を見ることが出来ず、そのチャンスを活かすことができないと効果的な戦術となる。
- 3) この戦術を用いる問題点は、  
「オフボールディフェンスのビジョン、ポジショニングの習慣はマンツーマンディフェンスとは異なる」  
「トラップに行くことはギャンブル性が高く、ディフェンスがボールに対してアタックすることばかりを習慣化させることは適切ではない」

## 【問題点】

- 1) オフボールディフェンスにおいて、ボールとマークマンの両方を捉える習慣がなくなる  
→ マークマンに注意を払わずボールに激しく行くことは、中学世代で特に通用するやり方  
→ 将来的なプレーヤーの習慣としては望ましくない
- 2) マンツーマンの原則を超えたプレーもバスケットボールでは自由であるというものの、育成世代の目標として獲得すべきものを守るためにルールが作られていた。ルール基準を緩和したことによりコミッショナー判定基準が緩くなった

## 【提言】

- 1) 中学世代は土台作りの時期であり、オンボール/オフボールのオフense/ディフェンスを高めるためにもマンツーマン以外のディフェンスは制限をしなければならない。
- 2) 中学世代のコミッショナーに対しては、予測に基づくプレーを認めつつもオフボールディフェンスのポジショニング、ビジョンの取り方について留意することを促す。

## 2. アンケート結果まとめ（プラス面）

### 【U12プラス面】

- ・ コミッショナーにゲームを止める権限が付与されたことでやり得を容認しないスタンスとなった。
- ・ 1対1の攻防が多くなり、オフェンスディフェンス双方のレベルアップが図られている。
- ・ ヘルプローテーション技術が徐々に身についてきている。
- ・ 指導者自身の意識改革が進んでいる
- ・ オフボールの選手の動く意識が高まる。選手全体のプレーへの参加意識が高まる。
- ・ ディフェンスにおいて選手の視野が広がる。
- ・ ディフェンス能力の向上がオフェンス能力の向上に繋がっていることに気づく指導者が増えた。

### 【U15プラス面】

- ・ 選手個々のレベルアップ、ファンダメンタルの定着が進んでいる。
- ・ 1対1の能力アップに指導者の目が向いている。
- ・ 高身長者の1対1のオフェンス力やディフェンス力が向上してきている。
- ・ 戦術的にオンボール・オフボールスクリーンを多用し、バスケットボールの質的向上が見受けられた。
- ・ ミニでのマンツーマン普及に伴い、マッチアップやヘルプの意識が向上した。
- ・ 選手に指導しやすくなっている。
- ・ ゾーンアタックやゾーンの練習に時間をかける必要がなく、個人技術の練習に時間をかけることができる。
- ・ マンツーマン指導のあり方、ジュニア期の選手育成のあり方について真摯に向き合い話し合う雰囲気ができている。
- ・ オフボールの動きの重要性が各チームに浸透してきている。
- ・ ディフェンスのヘルプローテーションの状況を読みながらプレーすることになり、判断力がつく。

## 2. アンケート結果まとめ（課題）

### 【オフェンス課題】

- ・未だに動きのないオフェンス、マッチアップエリアにいないオフェンスのマークマンをイリーガルと解釈していたりする指導者がいる。→**指導者への教育**
- ・オフボールの動きが悪く、適切なオフェンスができていないケースが多く見られる。→**オフェンスの理解**

### 【ディフェンス課題】

- ・連続トラップでボールマンに圧力をかけ続けてくるが、トラップが主眼となりマークマンへの意識が薄くなっているケースが何度かあった。→**オフボールディフェンスのビジョン、ポジショニング**
- ・ペイント付近のトラップについて、旗が挙がる・挙がらないがある。→**コミッショナー**
- ・ゾーンディフェンスが使えないため体格差によってオフェンスが成立する場面が増え、小さいチームのディフェンスが苦しくなっている。→**育成世代の考え方**

### 【戦術課題】

- ・リーガルなヘルプ、トラップの意識でさえ、イリーガルと解釈してしまい、チームディフェンス・オフェンスの考え方を学んだり発展させたりするチャンスを逸している場合が見られる。
- ・能力のないチームが戦術を工夫して勝利するといったバスケットボールの魅力の一つが削られている。
- ・積極的なゾーンディフェンス、ゾーンプレスを駆使して戦う機会がなくなった。ゾーンプレスの攻防の醍醐味を味わえない。→**育成世代の考え方 = 選手達に何を身につけさせるべきか、限られた時間で何を練習するべきか**

### 【コミッショナー課題】

- ・コミッショナーはレフリー程地位や立場が浸透しておらず、旗をあげるのが難しく、負担である。
- ・地区の中心の方の考えで地区全体が方向付けされている。
- ・コミッショナーを務めるプレッシャーや負担が重すぎる。
- ・コミッショナーによってとらえ方が異なり基準の統一が難しい。
- ・一部指導者のコミッショナーに対する接し方がひどい。→**テクニカルファウルの適用を検討中**
- ・読みの良いディフェンスは罰しないという解釈はグレーゾーンが多すぎてコミッショナーの共通理解を図ることが難しい。→**マンツーマンの前提が守られていけばよいのだが・**



## 2. アンケート結果まとめ（課題）

### 【指導者課題】→指導者の「フェアプレー精神」、「将来を見据えた指導」

- ・指導者の意識に温度差が顕著に見られ、プレイヤーズファーストに繋がっておらず、不平等さが現実問題として発生している。→指導者の育成世代に対する考え方
- ・指導者がルールの盲点を突くことばかりに気を取られる。→指導者のフェアプレー精神
- ・抗議ばかりして自チームの選手に目を向けていない。
- ・ゾーンディフェンスを指導することがなくなり、ミニや中学校の指導者がゾーンディフェンスの経験や知識が乏しくなることが不安。
- ・協会の方針と異なる指導をする指導者への対処。→指導者のフェアプレー精神に反する行動への対応
- ・地区大会ではコミッショナーがいないため、マンツーマンでもどきでゲームに勝っているチームがあり不平不満が起きている。→指導者のフェアプレー精神
- ・育成することと勝つことの両立を選手にどう指導し、指導者の方々にどう伝達していくべきか。

### 【運営課題】

- ・大会運営に必要な人員不足、費用確保。→都道府県大会運営経費
- ・全員が共通理解をしてマンツーマンディフェンスを行う、コミッショナーとして管理することは容易ではない。
- ・地区のコミッショナーはルール変更への対応が大変。→講習会、大会実施時の代表者会議での申し合わせ
- ・コミッショナーが試合中に止めることはなかなか厳しいのが現実であり、審判がコールしてショットクロックを戻すなどの処置で始められないか？
- ・旗をあげることで試合の流れが一気に変わる時がある。
- ・大会にて出張扱いが難しい場合あり。

- 1) U12/U15共に、マンツーマン推進は浸透してきている。
- 2) マンツーマン推進によって、コート上で出現するプレーは変化してきており、プラス効果が見られる
- 3) 育成世代で以下のような意識が指導者に生まれている。  
「マンツーマンがなぜ必要か」  
「ゾーンディフェンスはいつ学ぶべきか」  
「マンツーマンディフェンスをどのように指導するのか」  
「アイソレーションオフェンスはなぜよくないか」  
「勝利よりも優先して伝えるべき事項とは何か」
- 4) FIBAが求めた「世界に通じる選手を育成する」施策として「育成世代におけるマンツーマン推進」であったが、日本に定着しつつある方向。
- 5) 課題として
  - ① 指導者は「将来を見据えた指導」としてマンツーマンの理解を深め、指導していくこと
  - ② 指導者及びコミッショナーはマンツーマンとゾーンディフェンスの違いを理解すること
  - ③ コミッショナーはマンツーマン推進の目的を達成するために研鑽を積むこと
- 6) 現状の体制を継続すべきとの判断（コミッショナー設置人数などは検討）

1. 2018全中の検証
2. アンケート結果
3. 3年間の検証
4. 今後の方向性

- 1) フェアプレー精神を指導者/プレーヤーに浸透させる
- 2) マンツーマン推進事業を継続する
- 3) 指導者はマンツーマン推進事業の目的を再認識する
- 4) 指導者は基本技術の重要性の理解を深める
- 5) 指導者は育成世代で学ぶべきゲームモデルの理解を深める
- 6) コミッショナーは統一した見解を持つために情報共有を図り研鑽を積む

### ■ プレーヤー・指導者ともにフェアプレー精神を持つ

ルールの間隙を狙うのではなく、目的を理解し、プレーヤーにフェアプレー精神を伝えよう

- ルールを守る = 決めたことを守る
- 審判に従う = コミッショナーに従う
- 相手をリスペクトする = ルールの中で全力を尽くす相手を尊重する

「マンツーマンディフェンスを使って勝負をする」

### ■ 指導者はプレーヤーの将来を見据えた指導を行おう

- 強い「個」を作る必要があるので、指導者にマンツーマンを指導してもらおう

「ゾーンをするのは育成世代の目標から外れている」

「育成世代の勝利/成功は、勝敗だけでなく、将来の成長スピードを高める土台を身につけることでもある」

### ■ なぜマンツーマン推進が必要となったのか？

- 世界に通じるトップ選手を作り出していくため
- そのためには個の強化が必要であり
- 育成世代においてはまず個の強化の土台の構築が必要
- 勝利を得るためには組織的ディフェンスが効果的な年代
- 勝利よりも優先してやるべきことがあるのが育成年代

### ■ マンツーマンが必要である

- マンツーマンができないと選手としては成長スピードが遅れる
- ゾーンディフェンスはあるレベルを越えると通じにくくなる

### ■ 施策の今後

- 1) 育成世代の選手に求めるものは「個の力の獲得」であり、選手の将来を鑑み、選手の土台作りとしての要素を高めるためにも、この施策は継続して実施する方向である
- 2) プレイヤーがどのような能力を高めなければならないかを考えると、ゲームモデルについての理解を深めることも必要である。どのようなオフェンスを行えばディフェンスを崩せるのか、ヘルプが強いタイプに対してどのようなアタックが有効か、ハーフコートトラップに対しての対抗策や、トラップを突破するための個人技術の理解などを深めることにより、現状より進んだスタンダードが得られるものと考えている。

### ■ 「なぜ？」

- 1) ゾーンを4Qのみ許可することの要望について、これを許可すれば練習において準備をすることが必要となり、基本技術を学ぶ時間が削られる事がマイナスと考える。よって現状認めない方向である。
- 2) 高校世代でゾーンに慣れていないためマイナスとなるとの指摘について、マンツーマンの土台があれば、高校においてゾーンアタックを習得することは比較的容易になると考えている。

### ■ プレイヤーに獲得させたい土台

- 1) オンボールオフense : 1対1での突破力、判断能力の向上
- 2) オンボールディフェンス : 1対1で守る力
- 3) オフボールオフense : スペーシング、動きのタイミング（合わせ）
- 4) オフボールディフェンス : ビジョン（ボールとマーク）、ポジショニング、予測力

※ オンボール：ボールを持っている状態  
オフボール：ボールを持っていない状態

### ■ プレスブレイクの基本技術

- 1) トラップにおけるパスの仕方
- 2) バックドリブル&パス
- 3) トラップをスピードドリブルで突破する
- 4) ボールをスローインする
- 5) スペーシングとボールにミートして受けること

### ■ トラップにおけるパスにおけるティーチングポイント

- 1) 低さを保つ（肘を下げる）
- 2) ポジティブスタンスを意識
- 3) ワンハンドパスの利用（フェイクしてパス）
- 4) ラン&ジャンプに対してのバックドリブルの利用

### ■ プレスブレイクの教え方（ドリル）

- |                             |                     |
|-----------------------------|---------------------|
| 1) トラップにおけるパス2対3=オープンになってパス | ドリル：3対3ウイングトラップ     |
| 2) トラップにおけるパス2対3=フルコート      | ドリル：2対3エスケープ        |
| 3) バックドリブル2対3=フルコート         | ドリル：2対3エスケープバリエーション |
| 4) スピードドリブル=フルコート           | ドリル：2対2+1           |
| 5) インバウンドボール                | ドリル：3対3スクリーン&スリッパ   |
| 6) スペーシングとボールミート            | ドリル：4対4トラップドリル      |
| 7) プレスブレイク5対0               |                     |
| 8) プレスブレイク5対5               |                     |



### ■ ゲームモデルの段階

- 1) 1対1重視：突破を図ることを狙う段階（ペイントアタックの意識、突破技術を磨く）
  - ドライブ&キックが必要→スペーシングを指導
- 2) 1対1重視：パス&カットで人を動かし、ボールを動かすことで突破を図る段階
  - ディフェンスが強くなるので、動いてズレを生み出す
  - ボールをつなぐスポット、タイミングの指導
- 3) 1対1、2対2：パス&カットの中からオフボールスクリーンを利用する段階
  - スクリーナーのセット技術の指導
  - スクリーンを使うユーザーの技術の指導
  - スクリーンを使う必要がなければスペーシングを取ることを考えた方がよい
- 4) 1対1、2対2、3対3：相手のディフェンス力が高まり、自力で突破できない時にオンボールスクリーンを使って突破を図る段階
  - オンボールスクリーン・ボールマンの技術
  - オンボールスクリーン・スクリーナーの技術
  - オンボールスクリーン・ヘルプサイドのスペーシング及びプレー

■ 重要な視点

- 1) マッチアップしているか、マッチアップしようとしているか  
(人=マンツー、場所=ゾーン)
  - オフェンスのスタート
  - カッティングについていくか
  - トラップの後
  - ペネトレーションに対するヘルプの後
  
- 2) オフボールディフェンスのポジショニング、ビジョン (ボールとマークマン) を取ろうとしているか

日本バスケットボール  
未来構築のために

何卒皆様のご協力を  
お願い申し上げます

U12U15  
マンツーマン推進における  
テクニカルファウル対応変更について

2019/3

マンツーマン推進プロジェクト

## 1. インテグリティ委員会の経緯

- ・2018年12月25日 インテグリティ委員会設立(委員長:宇田川貴生) をJBA理事会で承認
- ・2019年1月28日 第1回インテグリティ委員会開催

## 2. 第1回インテグリティ委員会における決定内容

- ・JBA含め全ての団体における共通スローガン(主題)として【クリーンバスケット、クリーンゲーム】を決定した。
- ・JBAとしては副題として喫緊の課題である【暴力暴言根絶】とした。
- ・委員会としてスローガンを実現していくために以下を決定した。
  - 1) バナーを作成して大会においてメッセージを発信し、啓発活動を実施(2019年3月ジュニアオールスター、全国ミニ、4月より全国にて)
  - 2) コーチが全ての選手に対する暴力的行為及び暴言は競技規則に則りテクニカルファウル(C)として取り扱うことを確認した。
    - ※ 今までテクニカルファウルの運用としてコーチが選手に対する暴言等をテクニカルファウルの対象として取り扱っていなかった。
    - ※ 暴力行為に対しては、ディスクォリファイングファウルとして失格退場である。
  - 3) 競技規則によりテクニカルファウル(C) 2個で失格退場となるが、規律案件(次の試合出場停止等)とはせず当該試合のみの対応とする。
    - ※ 競技規則によるコーチの失格退場
      - a) ディスクォリファイングファウル 1個
      - b) テクニカルファウル(C) 2個
      - c) テクニカルファウル(B) 3個
      - d) テクニカルファウル(C) 1個+テクニカルファウル(B) 2個
  - 4) テクニカルファウルの対象となる暴力的行為及び暴言に関する事例集(ガイドライン)は、指導者養成・ユース育成部会で原案作成し、インテグリティ委員会で承認するものとする。

## 1. テクニカルファウルの扱い

- 1) 試合中、コーチが全ての選手に対する暴力的行為及び暴言に対しては、コーチのテクニカルファウル(C)とする。
- 2) コーチのテクニカルファウル(C) 2個で失格退場とする。  
※ U12ではこれまでテクニカルファウルによる失格退場はなかった。

## 2. マンツーマン推進のテクニカルファウル

- 1) マンツーマン推進における「赤旗対応によるテクニカルファウル」については「マンツーマンペナルティ(M)」とする。  
※ 競技規則に準じたテクニカルファウルと区別するため（マンツーマンペナルティは国内独自ルールである）
  1. マンツーマンペナルティの場合、スコアシートコーチ欄に(M)と記述する
  2. マンツーマンペナルティ(M)は、U12においては3個で失格退場とする。
  3. 失格退場に対しては規律案件としない。
  4. マンツーマンペナルティ(M)とテクニカルファウル(C・B)との合算による失格退場は設定しない。

## ■ コーチ失格退場のケースにおけるU12での対応 ※1

コーチライセンス資格を持つコーチが失格退場となった場合の試合継続の可否については競技規則に則り没収試合の扱いとしない。

※ 競技規則ではコーチが失格退場の場合、キャプテンが代行することになっている。

1. ベンチにヘッドコーチの他にアシスタントコーチをおく。 ※2
2. アシスタントコーチがいない場合はチーム代表者や保護者代表をベンチ登録すること。

※1 大会要項に記載しておくことが望ましい。

※2 複数の指導者がコーチライセンス資格を持っていることが望ましい。

## 1. テクニカルファウルの扱い

- 1) 試合中、コーチが全ての選手に対する暴力的行為及び暴言に対しては、コーチのテクニカルファウル(C)とする。
- 2) コーチのテクニカルファウル(C) 2個で失格退場とする。

## 2. マンツーマン推進のテクニカルファウル

- 1) マンツーマン推進における「赤旗対応によるテクニカルファウル」については「マンツーマンペナルティ(M)」とする。

※ 競技規則に準じたテクニカルファウルと区別するため（マンツーマンペナルティは国内独自ルールである）

1. マンツーマンペナルティの場合、スコアシートコーチ欄に(M)と記述する
2. マンツーマンペナルティ(M)はU15においては2個で失格退場とする。
3. 失格退場に対しては規律案件としない。
4. マンツーマンペナルティ(M)とテクニカルファウル(C・B)との合算による失格退場は設定しない。



## ■コーチ失格退場のケースにおけるU15での対応 ※1

コーチライセンス資格を持つコーチが失格退場となった場合の試合継続の可否については競技規則に則り没収試合の扱いとしない。

※ 競技規則ではコーチが失格退場の場合、キャプテンが代行することになっている。

1. ベンチにヘッドコーチの他にアシスタントコーチをおく。 ※2
2. アシスタントコーチがいない場合はチーム代表者等をベンチ登録すること。
3. コーチの失格退場によりベンチに指導者/代表者が不在となった場合、会場主任/コート主任等がベンチに入ることも可とする。 ※3

※1 上記項目を大会要項に記載しておくことが望ましい。

※2 複数の指導者がコーチライセンス資格を持っていることが望ましい。

※3 選手に試合の責任を負わせることは負担が大きいとの配慮からの処置である。大会において取り入れの可否を主催者が取り決めすることで構わない。

マンツーマン推進における判定基準の考え方

および

マンツーマン推進が目指す目的の再確認

2019/5/7

マンツーマン推進プロジェクト

## 1. マンツーマンコミッショナーによる判定の運用の考え方

- ・ U15世代のゲームにおいて、コミッショナーが判定の際にゲームの雰囲気や状況を考慮してしまい、違反事象があっても黄旗・赤旗対応ができないケースがあった。

（U12世代では事象があれば黄旗・赤旗対応をするように講習会等で周知をしていた）

## 2. マンツーマン推進プロジェクトの目的からの逸脱

- ・ 組織的ディフェンスの使用が見られ、プレイヤーに身につけさせたい習慣とは異なる狙いとなっている。
- ・ 「個の育成」というマンツーマン推進の目的が達成されない。
- ・ 「マンツーマンではない」と捉えられる事象であり、対応の整理が必要である。

## ● 考え方

コミッショナーは、ゲームの状況を考慮しながら判定を行うべきではなく、事象のみに対して客観的に判定する。

## ● 理由

心情やゲーム状況を考慮に入れながら判定することは、判定者の主観が大きく含まれることになり、判定基準の幅が広がることに繋がり、明確性に欠けることになる。

## ● 今後

ゲームにおいてコミッショナーが判定する際の考え方（事象のみに対して客観的に判定する）を周知徹底する。  
ルールの変更ではないため、できる限り速やかに実施運用をお願いする。  
全中ブロック・全中では実施する。

## ● そもそもなぜマンツーマン推進を行っているか

個の育成を行うため。

日本のバスケットボールの強化育成、そして日本バスケットボールの活性化に繋がる事業。

## ● 個の育成とは何を指しているのか

個人のオンボールのオフense・ディフェンス、オフボールのオフense・ディフェンスを身につけ向上させること。

- オンボールオフense : 個人で破っていく力、得点を取る力
  - ・ ショット、ドライブ、パス、1対1の駆け引き
- オンボールディフェンス : 個人で守りきる力
  - ・ ショット、ドライブを止める（インラインを守り続ける）
- オフボールオフense : スペーシング
  - ・ どこにいるか、どこへ動くか
  - タイミング
  - ・ いつ動くか
- オフボールディフェンス : ポジショニング
  - ・ マークマンをノーマークにしない
  - ・ ボールマンディフェンスを助ける
  - ビジョン
  - ・ ボールとマークマンを常に捉える
  - 予測する力

## ● 育成世代における戦術の利用

### (元日本代表HCジェリコ・パブリセビッチ氏の言葉より)

- ・日本の指導者は戦術の研究に長けている。
- ・一方で個の育成が不足している。
- ・戦術を取り入れることでチームは勝利を得るかも知れないが、選手が得るものが少ない。
- ・その理由は、次の世代でチームが代わりコーチが代われればその戦術を使わない場合が多い。
- ・その選手は新たなコーチの元ではプレーできなくなる場合もある。
- ・これを避けるためには、どのコーチの元でも通用するものを身につけておくこと、これが土台となる。
- ・育成世代ではポジションを早期に決めることなく、オールラウンドにプレーできるように指導することが大切である。

## ● 育成世代での戦術導入を多くしすぎないこと (提言)

- ・戦術を取り入れるのは、チームの勝利を目指すことが優先されていないかを考えて欲しい。
- ・育成世代の勝利は、大会結果や代表やトップ選手を作ることだけでなく、将来大きく成長する土台を植え付けること、バスケットボールを楽しむことができる選手を作ることと捉えていただきたい。
- ・オフェンスにおいても早期にスクリーンを導入することは個の突破力を高めることを阻害するとも考えられ、14~15歳頃からの導入が望ましいと考えている。

## ● 考え方(JBA技術委員会で話されている内容)

- ・国際大会で日本代表が対戦する相手は強く大きい。
- ・男女共に、ギャンブルを仕掛けるよりも、しっかり破れを作らないようにして守ることが優先と考えている。

## ● 国内で勝つことと国際で勝つことの違い

- ・育成指導者は国内で勝つことだけではなく、将来国際的に通用する選手を作る目標を持つ。
- ・国内で通用する戦術、国際で通用しない戦術は存在する。  
このことは何か、育成指導者全体で共有したい。

## ● アンダーカテゴリー代表での要求：オンボールディフェンス

- ・簡単にレイアップされず、一人で守りきる力を持つ。
- ・簡単にショットされないクローズアウトからのオンボールディフェンス、ドライブ対応力を身につける。

## ● アンダーカテゴリー代表での要求：オフボールディフェンス

- ・オーバーヘルプをしないようにしながら、オンボールディフェンスを助けるポジションを続ける。
- ・オーバーヘルプとはヘルプに行きすぎること。その結果ノーマークをある時間作ることで、ローテーションが必要となること、強いチームはオーバーヘルプによってできた穴を見つけることにつながる。
- ・ボールとマークマンの両方をビジョンとしてとり続けることで、マークマンをノーマークにすることを防ぎ、何が次のプレーとして起こりそうかを予測することに繋がっていく。

## ● 育成世代指導者の考え方

スペインでは、育成世代でゾーンを行うことは指導者のモラルに反することと考えられている。育成世代の選手にゾーンを教えても将来プラスにならないのになぜ指導者がそれを教えるのか、という考え方である。

## ● 育成世代のコーチングの考え方を見直そう

誰のために、何のために、コーチングをするのでしょうか？

選手の成長できるための土台を作る助けをしてあげましょう。

将来を見据えた指導を行いましょう。

バスケットボールの楽しさを教え、徐々に競争を教えてあげましょう。

強化を目指す選手にはより高度なものを学ばせ、楽しさを重視する選手には楽しめる範囲でのやり方を教えてあげましょう。

## ● Basketball for LIFE

トップに辿り着いた選手も必ず引退します。トップに行った選手も行かなかった選手もずっとバスケットボールと良い形で関わって欲しい、それは普及に繋がっていきます。

人生の中でのバスケットボールを指導者は考えてあげるべきです。

育成年代からのバスケットボールとの関わり方が選手のバスケットボール人生に大いに関係しています。

このことを育成世代の指導者は常に頭に置かなければなりません。

「育成指導者は選手の未来に関わっている」  
「育成指導者はバスケットボールの未来を創っている」



# 2017年度 全国マンツーマンディレクター会議

2017/12/9 @NTC

JBAマンツーマン推進プロジェクト

## ■ 始めに なぜマンツーマン推進・育成改革をお願いしているか

1. マンツーマン推進の基本的な考え方の確認
2. 運用における変更点
  - ・ 予測に基づくプレイ（中学のみ）
  - ・ トラップの三要件（中学のみ）
  - ・ 制限区域内でのトラップ（ミニ・中学共通）
  - 映像：リーガルの例・イリーガルの例

### ★ 質疑応答

3. マンツーマン推進の運用における課題・対応策について
4. マンツーマンディレクターの都道府県内での位置づけ

### ★ 質疑応答

なぜマンツーマン推進・育成改革を  
進めているのか？

# 世界に通用するバスケットボール 強化

世界基準を日常に取り入れる

世界を目指す環境

世界を視野に入れた指導を日常から行う



# 国内で活気あるバスケットボール 普及

バスケットボール愛好者を増やす  
バスケットボールを楽しめる！上手になる！  
日本代表が強い！応援する！



## ■育成世代における問題

- 系統的でない指導
- 過剰な競争
- 練習が少ない
- 大人と同じ競技スケジュール
- 大人と同じトレーニングプログラム
- 大人と同じ練習量
- 男子と女子の年代におけるトレーニング内容が同じ  
(発達は女子が早い)
- 過程（取り組み方）より結果（勝敗）に焦点がある
- 精神的に未熟な選手への過度の要求
- 保護者のクレーム、結果が大切という価値観

## ■育成方針（育成世代で重要視すべき考え方）

- ・年代毎(習熟別) に練習内容を変える（技術・戦術練習の割合、量・質）
- ・ゲームを多く経験すること→トーナメントではなくリーグ文化
- ・バスケットを楽しませて将来に繋げる
- ・トライ&エラーをさせる
- ・**技術を学ぶ年代** = 認知判断を伴う技術練習を多く、戦術練習の割合
- ・能力別（飛び級）の環境 = 育成センターU12/U14/U16
- ・**世界を目指した指導** = 誰もがオールラウンドプレイヤーを目指す
- ・**年代別指導（ラーニングエイジ）** = 習熟度別に、易→難
- ・勝利至上でない = 勝利のとらえ方 = 結果だけではなく過程に焦点を当てる
- ・障害を引き起こさない、バーンアウトさせない
- ・LTAD（長期選手育成理論）を考慮
- ・人間教育、人格形成 = 人間力向上なくして競技力向上なし
- ・保護者教育 = 家庭でも選手がポジティブに成長（栄養・精神的サポート）
- ・スポーツ医科学の利用

育成世代の選手にこれらを経験させていく環境づくり

↓ 実行していけば

将来は質の違ったプレイヤーが育成される

## 選手の将来とは？



インサイドで背中向きにプレーしている選手がドリブルを自在に使えるようになるだろうか？

インサイドで背中向きのプレーを要求したり、強いたりしているのは大人(指導者)ではないか？

**ポジションを決めるのは15歳なってからでいい!!**

**バスケットボールの基本を学ぶことが育成世代では重要**



基本とは、ドリブル・パス・ショット、そしてマンツーマンディフェンスである

## 選手の将来のために指導者が意識すること

どの子どもたちにもドリブル・パス・ショットを教えてオールラウンダーを育てよう

突破できる強い「個」を相手にストップできる「個」を育てなくてははいけない





## 4つの変革

- ① 指導内容・育成コーチング啓発
- ② 育成センター設立
- ③ リーグ戦制度
- ④ 大会整備

特に「**コーチング:指導者教育**」が**最重要課題**であることを認識  
(良いシステムを作っても指導者が良くなければ良い結果にならない)

## 4つの変革 5つの変革

### ★ マンツーマン推進(2015/8/12~)

- ① 指導内容・育成コーチング啓発
- ② 育成センター設立
- ③ リーグ戦制度
- ④ 大会整備

特に「**コーチング:指導者教育**」が最重要課題であることを認識  
(良いシステムを作っても指導者が良くなければ良い結果にならない)

# Why?

改革を進める上で  
「なぜ行うかを知ること」が重要な理由

伝えた大義

日本のバスケットボールを良くすれば  
日本は良くなる

育成環境を変えれば  
日本のバスケットボールは強くなり  
さらに普及活性化が進む

皆でバスケットボールを  
良くしようではないか

女子は世界でメダル！  
男子も世界に通じる時が来る！



バスケットボールで  
日本を元気にします！

「夢＝大義」を皆で共有すること

「夢＝大義」がモチベーションになる  
「何をやるか」よりも  
「なぜやるか」で自分事になる

他人事ではなく  
自分事になってもらう事が必要

選手たちを最大限成長させるために

- 様々なバックグラウンドを持つ人々が本音をぶつけ合い、痛みや犠牲を伴いながらも協力し合って課題に取り組むことが不可欠。
- 大切な何かを成し遂げたいという強い思いがあるときに、自分の役割や立場を超えて、周りの人達の持つ力を引き出しながら、自らもリスクを取って課題を前進させることが必要 = 皆がリーダーシップを取り合っていくこと
- 我々バスケットに携わる者が自分の価値観や信条を問い直し、痛みや喪失を受け入れ、新たな見方や考え方を見つけることによって自らの行動を変えていくことが必要
- 我々が自らを適応させながら課題に対処できるような力を作り出し、抵抗や排除にあいながらも関係する人々をまとめ上げ動かして行くことが必要

- 難題に取り組み、成功するように人々をまとめ上げ、動かして行くこと
- 変えずに残すもの、捨ててしまっても良いものを見極めに人々を参加させること。  
抵抗しているのは変化そのものではなく、変化がもたらす**喪失（失うことに対する不安・恐れ）**にある。
- 実験的マインドセットが不可欠 = **臨機応変に対処**することを学ぶ
- 喪失を生み出すことが多いため、喪失を診断する力、その対処法も知っておく
- **適応には時間がかかる** = **持続性**が求められる。途中で批判を受けることがあっても決して役割を放棄してはいけない。組織は結果が読めない変革に挑戦して多くの人にデメリットが生じるよりも**現状維持を好むのが普通**。
- 取り組みにより、組織の対応力が時間をかけて築かれ、新たな規範を生むプロセスが作られる

◎ 適応力が求められる難しい変革を実行して経験知とする

- 都道府県協会内でカテゴリーを超えて集まる機会を持って頂きたい
- 困難な問題に立ち向かうことへ結束を強め方法論についてシェアして頂きたい
- 難しいカテゴリー、難しい市町村や地区が出てくる  
人々を適応させていくことに皆で協力をして頂きたい

# マンツーマン推進の基本的な考え方



- これまで通りマンツーマンの推進を進める。この趣旨は変更しない。
- マンツーマンディフェンスでなければ選手たちは学ぶべき内容を学ばないことに繋がってしまうためである。
- 優れたマンツーマンディフェンスは、局面においてゾーンの要素を持つ。プレイヤーの成長を促すために運用範囲を拡大しようとしているが、これを悪用してはならない。
- 勝利を求めるあまり、指導者がルールの抜け道を探すことに躍起になってはならない。
- 指導者は「育成年代における勝利の意味」を見つめ直すことが重要である。

- プレイーズファーストの観点で選手が育成世代において最大の成長を見せ、将来の基礎を学ぶことができる様にマンツーマンを推進する。
- JBA技術委員会では育成年代のマンツーマン推進を支持している。ゾーンディフェンス・ゾーンオフェンスはマンツーマンディフェンス・オフェンスの基礎があれば、それ程の長い時間をかけずとも習得できると考えている。
- ピリオド毎にゾーンを許可してはどうかという提案もあるが、練習においてゾーンディフェンス、ゾーンオフェンス、ゾーンプレスアタック、ゾーンプレスディフェンスの練習が増加することとなり、プレイヤーの個人技練習に充てる時間が減少する観点から導入しない考えである。
- 体力・技能の低いチームがゾーンで勝ちたい、ゾーンディフェンスの方法論を許さないことは選手のモチベーションを下げる、という意見に対しては、個人技術の習得が育成年代における勝利であることを再認識していただきたいと考えている。

# 運用における変更点

以下の2つはU15中学カテゴリーのみの変更である

1. 「マンツーマンディフェンスを行っている前提において、予測に基づくプレイとコミッショナーが判断した場合は、基準規則違反とは見なさない。」
  
2. 「ボールを保持しているプレイヤーへのトラップは許される。」

以下はU12ミニ・U15中学両方の変更である

3. 「制限区域内において、予測に基づいてボールを持っていない  
オフェンス側プレイヤーをトラップすることは許される。」

以下はU15中学カテゴリーのみの変更

1. 「マンツーマンディフェンスを行っている前提において、予測に基づくプレイとコミッショナーが判断した場合は、基準規則違反とは見なさない。」

「マンツーマンディフェンスの基準規則の補則解説」への追加

## ◆予測に基づくプレイについて

U15（中学生）においては、マンツーマンディフェンスを行っている前提において、予測に基づくプレイとコミッショナーが判断した場合、基準規則違反とは見なさない。

- ※ 「予測に基づく」とは、予測の根拠となる動きがあることを示す
- ※ マークマンを意識せずにエリアを守ることはマンツーマンの趣旨に反するため許されない。
- ※ ミニバスケットボールにおいては本項は適用しないが、「マンツーマンディフェンスの基準規則」通り、制限区域内のみで予測に基づいてボールを持っていないオフェンス側プレイヤーをトラップすることは許される。

以下はU15中学カテゴリーのみの変更

## 2. 「ボールを保持しているプレイヤーへのトラップは許される。」

「マンツーマンディフェンスの基準規則の補則解説」への追加

### ◆トラップについて

「マンツーマンディフェンスの基準規則 2. プレスディフェンス 及び 4. オフボールディフェンス」に関する補足

ミニバスケットボールにおいてボールを持っている選手にトラップが仕掛けられる場面は次の通りとする。

- 1) ドリブルが行われている時、またはドリブルが終わった時
- 2) パスが空中にある間に移動できる距離で、パスを受けた瞬間にトラップを成立させることができる時
- 3) 移動が容易に行える距離にある時（自分のマークマンとボールマンの距離の目安:2~3m）

※U15（中学生）では上記（1）～（3）を適用せず、全ての場面においてボールを保持している選手へのトラップは許される。

以下はU12ミニ・U15中学両方の変更である

3. 「制限区域内において、予測に基づいてボールを持っていないオフェンス側プレイヤーをトラップすることは許される。」

「マンツーマンディフェンスの基準規則」への追加

#### 4. オフボールディフェンス (～省略)

全てのヘルプサイドにいるディフェンス側プレイヤーは、最低限片足はヘルプサイドに置かなくてはならない。ボールサイドとヘルプサイドの境界線は、ミドルライン（リングとリングを結ぶ線）である。ただし、ヘルプまたはトラップに行く場合を除く。

全てのポジションで、ボールを持っていないオフェンス側プレイヤーをトラップすることは違反である。ただし、制限区域内において、予測に基づいてボールを持っていないオフェンス側プレイヤーをトラップすることは許される。



# 映像による確認

# マンツーマン推進における プラス面と課題

ほとんどの県でコミッショナー養成講習会が企画運営されている

多くの大会で可能な限りコミッショナーを配置して頂いている

指導の効率化:ゾーン対策に時間を割く必要がない

選手個々のレベルアップ、ファンダメンタル定着にプラスになっている

1対1の場面が増え、技術向上を意識することが多くなった

コミッショナーと審判がコミュニケーションをとり、さらにコミッショナーがベンチともコミュニケーションをとることであえて赤旗をあげずに選手に対して指導ができているケースが多く見られる

モーションオートマティックなど工夫をするチームが増えてきた

大きな選手がゴール下だけでなく3ポイントラインまでディフェンスをしなければならなくなったので大きくて動けるオールラウンダーが増えている

立ったままになりがちだった長身選手に対するディフェンス指導の一助となっている

ルール導入に理解のあるチーム同士の試合はとても魅力的になった

スクリーンプレーの技能向上とディフェンス力の向上

全員で攻撃し全員で守備をする意識のチームが増えてきた

スペーシングを意識したオフェンスが展開されるようになってきた

## ■ 指導者

コミッショナーへのクレーム

指導者が勉強する幅が少なくなった

ゾーンを利用した戦術を考えることができないため、相手チームとの駆け引きでのおもしろさが薄まっている

アイソレーションオフェンスが増えている

ヘルプディフェンスをされにくい場所へ移動するだけというオフェンスが展開され、オフボールオフェンスプレイヤーの技術が向上されないケースがある

基準は分かっているにもかかわらずその方が勝てるという考えでマンツーマンを選手に指導していないケースがある

ミニにおいて指差しさえしていれば旗が上がらないという指導をしている指導者有り

## ■ コミッショナー

赤旗をあげる回数が少ない

基準統一ができていない

## ■ 運用

大会運営に人が足りない

コミッショナー設置費用がない

未登録チームに指導が困難

方針の異なる指導者への指導

## ■ 制度

ゾーンオフェンス・ディフェンスをコーチ・選手ともに知らない  
高校以上にどのような影響があるのか

中学校レベルで「育成すること」と「勝つこと」の両立を選手にどのように指導し、指導者の方々に伝えていくべきか

中学校チームは部活動の位置づけの中での活動であることを考えると、専門性の低い顧問が指導しているチームへの配慮やアプローチを考えるべきである

# マンツーマンディレクターの 役割と位置づけ

## マンツーマンディレクターの設置目的

- 都道府県内においてマンツーマンの趣旨や導入目的を指導者および選手に浸透させ、子供たちのためにより良い競技環境を構築すること。
- 日本全国において一貫した基準でのマンツーマンの推進を行うこと。

## マンツーマンディレクターの資格要件

- バスケットボール競技特性を熟知し、以下の役割を担える者
- JBAコーチライセンス保有者（C級以上が望ましい）



### マンツーマンディレクターの主な役割

- 都道府県協会において、マンツーマン推進の中心的役割を担う。
- 都道府県内において、マンツーマン推進の趣旨、導入目的を指導者および選手等に伝達する。
- 都道府県内において、マンツーマンを推進するための講習会を企画・立案し、指導者およびマンツーマンコミッショナーの育成・強化を図る。
- JBAおよび都道府県内の関連団体（中体連、中学生連盟、ミニ連盟等）と連携し、情報発信・収集を行うとともに円滑なマンツーマンの推進を図る。
- （必要に応じて）アシスタントディレクターの養成を行う。

### その他

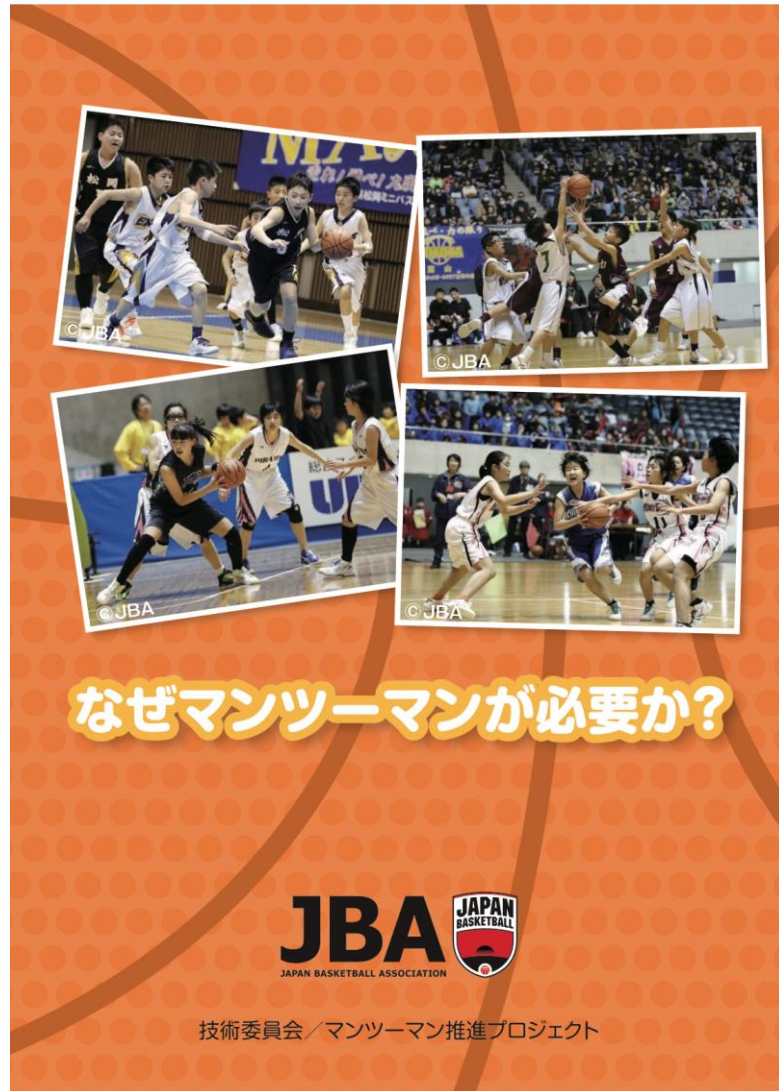
- 都道府県協会とJBAとの窓口を一本化するためにマンツーマンディレクターは各都道府県協会1名としますが、各協会においてディレクターの補佐を行うアシスタントディレクターを設置していただいても構いません（人数制限も行いません）。
- 各都道府県の状況に応じて円滑な推進が可能な体制の構築をお願い致します。

## ■位置づけ

1. **都道府県アンダーカテゴリー一部会内**に設置をお願いしている  
(ただしユース育成組織との連携は必要)

## ■役割

2. 大会におけるコミッショナー設置整備  
コミッショナー人員配置  
コミッショナー教育：講習会実施
3. 都道府県内でのミニ、中学におけるマンツーマン推進事業  
情報展開：講習会実施計画  
情報収集：アンケートまとめ、問題点報告等



- 2017年11月刊行
- ミニ/中学登録チームに配布できるように30000部作成
- 今回の改定内容は残念ながら反映されていない
- 都道府県で是非ご活用頂きたい

日本バスケットボール界発展のために

選手の最大限の成長のために

これまで同様

皆様のご理解ご協力をお願い申し上げます

2016年度  
全国マンツーマンディレクター会議

2016/12/10

- ① Japan Basketball Standard
- ② マンツーマン推進の重要性再確認
- ③ ディレクター役割再確認
  - 都道府県における周知理解推進
  - 都道府県協会内での伝達系路
- ④ 実態調査より～成果・課題について
- ⑤ なぜマンツーマンが必要か
- ⑥ マンツーマン、ゾーンの定義の確認
- ⑦ コミッショナー役割・判断基準
- ⑧ マンツーマンディフェンスドリル～判断基準整理

## ①マンツーマン推進の目的について

発育・発達段階に応じた適切な指導で選手をより高いレベルへ導く

子どもたちがよりバスケットボールを楽しみ、打ち込める環境を作る

日本全体の競技力を向上させる



**「プレイヤーズファースト」を尊重し、  
目先の勝利に捉われない長期的視点に立った指導の推進**



- ・ 1対1でバスケットボールを楽しむ。
- ・ 個人のスキルアップを図る。
- ・ 状況判断力、理解力を高める。
- ・ 想像力を養う。



- ・ 強力な1対1の突破力、得点力のある選手が育つ。
- ・ ディフェンスで相手を止められる選手が育つ。
- ・ 高い運動能力を持ち、オールラウンドに活躍できる選手が育つ。
- ・ マンツーマンディフェンスの強化により、将来的なゾーンディフェンスの活用を含めた総合的なディフェンス力の強化が実現する。



- ・ **バスケットボールを楽しむ選手が増える。**
- ・ **世界で活躍できる選手が増える。**
- ・ **強い日本代表チームができる。**

- ・世界の強豪国では16歳以下のゾーンディフェンスを禁止しており、国際バスケットボール連盟（FIBA）もミニバスでは禁止している。
- ・日本では、ミニ（U-12）のチームの多くがゾーンディフェンスを導入しており、中学校(U-15)のチームの多くがゾーンディフェンスを中心に試合を組み立てている。
- ・15歳まではコーディネーショントレーニングや基礎的なスキルを学ぶべき年代であるが、ゾーンディフェンスというシステムを主に指導されるため、オフェンス、ディフェンスの両面において1対1の対応力が不足している。

- 小学生、中学生を対象とした施策であるため「**指導者のみならず、保護者への理解**」が必要であること
- 成長段階にある子どもたちが対象になることから、「**体力や技術不足により起こる違反行為**」については、**配慮が必要**であること



上記の2点については常に念頭において、  
施策の実行に当たること

## ②マンツーマンディレクターの役割・推進体制について

## マンツーマンディレクターの設置目的

- 都道府県内においてマンツーマンの趣旨や導入目的を指導者および選手に浸透させ、子供たちのためにより良い競技環境を構築すること。
- 日本全国において一貫した基準でのマンツーマンの推進を行うこと。

## マンツーマンディレクターの資格要件

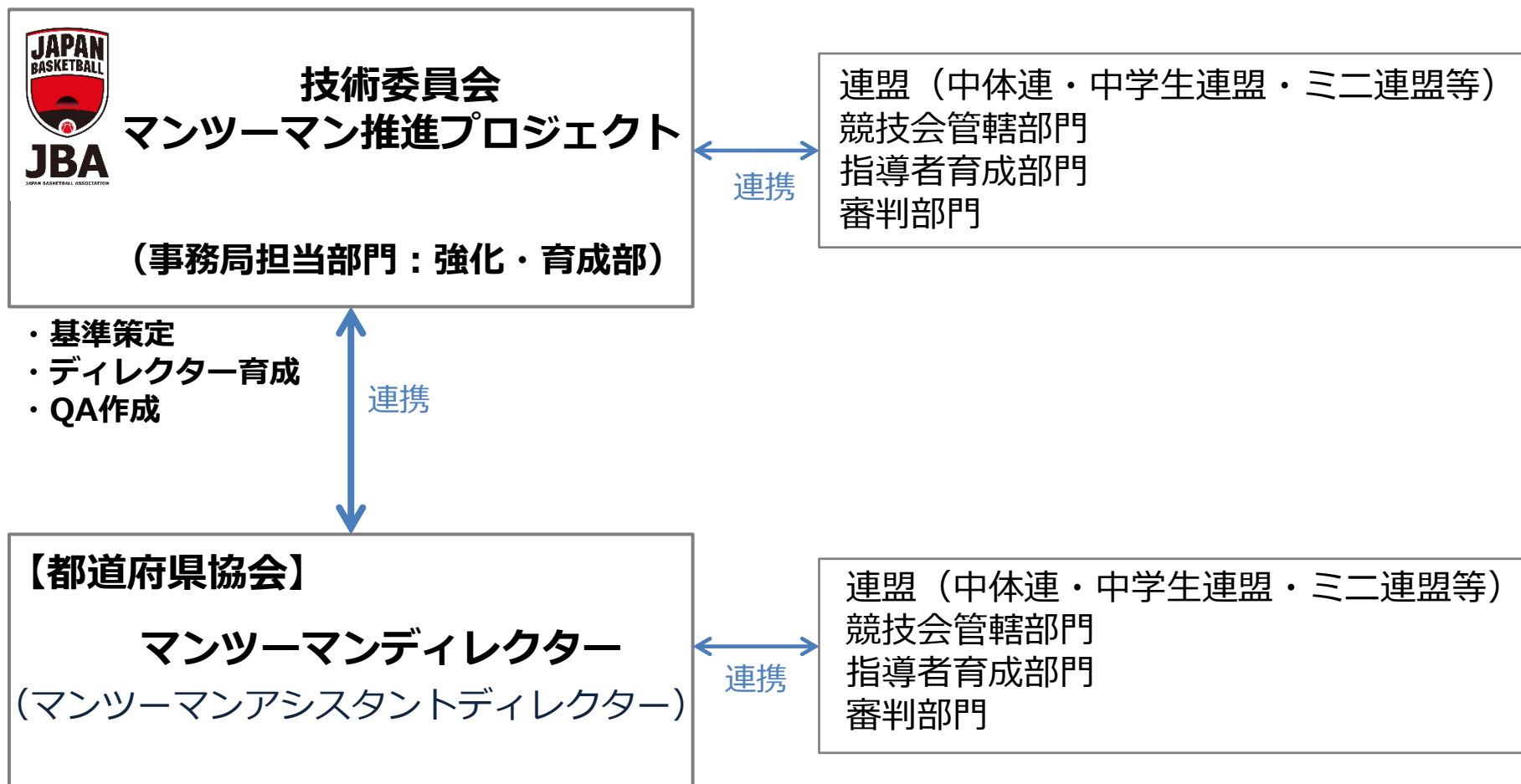
- バスケットボール競技特性を熟知し、以下の役割を担える者
- JBAコーチライセンス保有者（C級以上が望ましい）

### マンツーマンディレクターの主な役割

- 都道府県協会において、マンツーマン推進の中心的役割を担う。
- 都道府県内において、マンツーマン推進の趣旨、導入目的を指導者および選手等に伝達する。
- 都道府県内において、マンツーマンを推進するための講習会を企画・立案し、指導者およびマンツーマンコミッショナーの育成・強化を図る。
- JBAおよび都道府県内の関連団体（中体連、中学生連盟、ミニ連盟等）と連携し、情報発信・収集を行うとともに、円滑なマンツーマンの推進を図る。
- （必要に応じて）アシスタントディレクターの養成を行う。

### その他

- 都道府県協会とJBAとの窓口を一本化するためにマンツーマンディレクターは各都道府県協会1名としますが、各協会においてディレクターの補佐を行うアシスタントディレクターを設置していただいても構いません（人数制限も行いません）。各都道府県の状況に応じて円滑な推進が可能な体制の構築をお願い致します。



※旧「マンツーマンディフェンス推進委員会」は、組織再編に伴い、技術委員会傘下のプロジェクトとして設置

## ● 構成

- プロジェクト長：** 山本明（技術委員会副委員長、ユース育成部会部会長）、  
**委員：** 小倉恭志・若山暁・松澤年紀（中学生連盟代表）、  
永井一彦（日本中体連バスケットボール競技部長）、  
坂本昌彦（ミニ連盟代表）、  
村上佳司（ユース育成部会）、西垂水栄作（指導者養成部会）  
蒲健一、飯塚剛（審判代表）
- 指導グループ：** トーステン・ロイブル（男子ジュニア専任コーチ）  
牧野広良（ユース育成部会WG・ミニ連普及技術委員長）
- オブザーバー：** 田口智靖、青柳彰（中学生連盟）

## ● 主な役割

- プロジェクト：** マンツーマンを全国に普及・推進するにあたっての  
基準・ルール策定、全国における実施状況の確認、教材作成等
- 指導グループ：** 技術面に関する問合せの対応、ディレクター、コミッショナー  
養成・指導への支援（派遣含む）等

## ● 連絡窓口

JBA事務局 強化・育成部（担当：川島、関根）  
TEL 03-4415-2020 FAX 03-4415-2020  
MAIL [u15mandf@basketball.or.jp](mailto:u15mandf@basketball.or.jp)



### ③ 実態調査結果について

## 成果 (1) オフェンス

- いい動きが見られるようになった
- スクリーンを多用するようになった
- スペーシングの取り方の理解、1対1の強化につながっている
- 積極的に1対1をしようとするプレーへの意識変化あり

## 成果 (2) ディフェンス

- 各指導者の勉強意欲が高まり、ディフェンスの意識が高まっている
- 各チームの意識はかなり変わり、マンツーマンでしっかりディフェンスをするという徹底ができてきた

## 成果（3）運営

- 明らかなゾーンディフェンスはなくなった
- 大会中の全試合で1回も旗が上がらなかったチームを表彰しようとする動きあり
- マンツーマンに全チームが取り組んでいる
- 全チームのコーチが快く対応しゲーム中の修正ができる
- 「ペイントエリアで立っているだけのゾーン」「スローインで直ちにボールを奪うゾンプレス」がなくなり選手個々の攻防が多く生まれ、ゲームの質は良くなった
- 今まで見過ごされてきたビッグマンも頑張らせようとするチームが増えてきた
- 大きな選手同士がオールコートで1対1を行う場面が増えた
- ミニ・中学の間で県全体でマンツーマンを理解しようという連携あり

## 成果（4）指導者

- マンツーマンをきちんと指導しよう、指導したいという気運は高まっている
- 基礎技術に目を向ける指導者が増え、指導について学ぶ姿勢が向上した
- 守り方攻め方をディスカッションする場面が増えた
- 実施の意識は指導者始め選手にも確実に浸透してきている。今後も実施徹底を図っていきたい
- 指導者はゾーン対策を考えなくて良くなり、個人技術向上のために時間を使える

## 課題（1）運営面

- ルール策定
- 組織化・予算
- ミニ・中学・レフリー連携
- 大会運営
- 外部指導者・専門外顧問

## 課題（2）コミッショナー育成

- 赤旗の対応
- スケジュール
- 現場の課題
- ミニと中学の基準
- コミッショナー育成方法論

## 課題 (3) ディフェンス

- 現場の課題
- ハーフコート
- フルコート
- 1～6年生混在
- トラップの解釈

## 課題 (4) オフェンス

- アイソレーション
  - 能力の高い選手に1対1をさせることの増加
- オフェンス側の課題
  - シュート力がない
  - 動かないオフェンスで守られる
  - 個々のスキルアップの前に戦術で解決しようとする

## 課題 (5) 指導者教育

- 目的意識の欠如
- 規則の抜け道
- 専門外顧問
- 周知不足・理解不足
- 勝利至上主義

## 課題 (6) 保護者教育

- 意識付け・理解を求める必要性



**バスケットボールで  
日本を元気にします!**



日本  
バスケットボール  
新世代

# 将来を担う日本人のモデル選手

- 素晴らしい運動能力を備えた動ける選手
- ディフェンス意識のある選手ー相手を止められる選手
- 国際的に通用する得点を取れる選手
- サイズは小さくても素晴らしいもしくは相手を1対1で圧倒出来る選手

国際レベルでトップの選手で、日本人選手は何人いるか？

いない！

何故だろう？

# 現在の日本人選手

- 素晴らしい運動能力を備え、動ける選手が **いない**
- ディフェンス意識が強く国際的トップ選手を止める事が **出来ない**
- アンダーサイズだが、1対1が素晴らしい又は圧倒出来る選手が **いない**

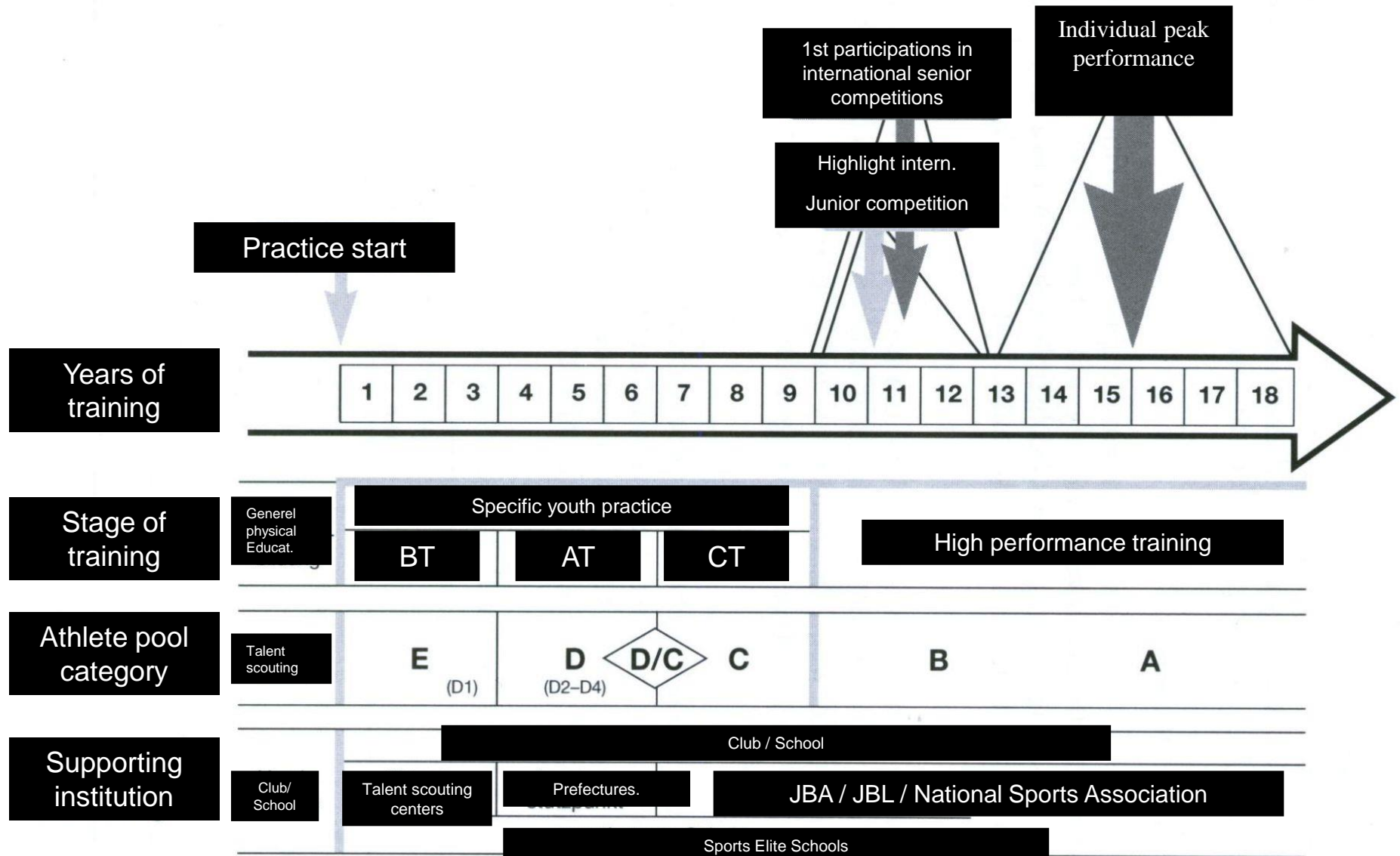
# 勝利の条件：強い1対1ゲーム

- まず最初に1対1ゲームを覚える
- 競争する(“1対1で争う”)
- ゲームを楽しむ
- 想像力を持つ

# 日本人選手の現状

- 素晴らしい運動能力と傑出した動ける能力が**無い**
- 優先順位をディフェンスにおき、国際的トップ選手を抑える能力**はない**
- サイズがないうえ、1対1の技術が素晴らしいとか圧倒的では**ない**

# タレント育成プログラム(ヨーロッパモデル)



# 日本人選手にチャンスをも！

- ゾーンディフェンスをやめる
- 選手に、最初から1対1を教える
- 選手にゲームを楽しませましょう
- 選手にチャンスをも！